

くく居残りくく

※ この話は真奈が公民館で居残りを命じられたときのお話となります。

「今野。解散したら一度公民館に戻って来なさい」

朝、顔を洗おうと部屋を出ると勝行に声を掛けられた。

「なんで……ですか……」

「後片付けの人手が足りないんだ」

「それなら他の皆にも声をかけます」

「いや、今野だけでいい」

自分にだけ別途残業を求める勝行の目的はわかっている。

あの姿にニヤ付いた顔と猫撫で声の裏ではきっと……。

「私だけなんて不公平です……。皆が来ないなら私も参加しません」

「なら先生は昨日、今野が中倉の荷物を漁ったのを話してやろうかな……」

「ずるい……」

昨日のうかつな行動を後悔するも既に遅い。今は彼に従うべきか悩むが、新たな悩みの種が増えるだけのこと。むしろ自分の浅はかな行為を晒されて綾子とのことをおおよけにしてしまう方が安全か……？　だが、彼女の陰湿な性格を考えると、その後がどうなるかわからない。

何が正解と言えるのかわからず、真奈は困惑を強めるばかり。

「岩村先生。ここに居ましたか。そろそろ朝食の準備が始まりますよ」

すると元治が通路から顔を出す。

「井沢先生」

おっきの教員は勝行だけではない。元治も居た。

まだ若く赴任してきたばかりの元治だけれど生徒思いという噂だ。養護教諭ということもあって話しやすく真奈も悪い印象がない。

「……わかりました。残ります。だから……あのことは」

「わかってくれて良かった。ま、悪戯の罰ということだ。反省しなさい」

「はい……」

綾子の荷物を漁ったことに罰があるのなら、自分の尊厳を弄んだ彼女にだって罰があるべきなのに……。

真奈は理不尽な気持ちを抱きつつ、せめて元治の傍を離れまいと気持ちを整えた……。

「これはどこに持っていけばいいんですか？」

「それは二階の倉庫だね。ありがとう、今野さん、お休みの所手伝ってくれて。すごく助かるよ」

「いえ、そんなこと。私も助かりますから」

作戦は成功したといえるだろう。

勝行に言われた通り一旦帰宅するふりをして公民館に戻って手伝うことを元治に話す。そこまでは勝行の目論見どおりなのだろうけれど、その後は元治にべったり付きまとうことで勝行を寄せ付けない。

このまま昼まで経てば元治の方から帰るように切り出すだろう。それまでなんとか時間を稼ぎたかった。

「……え？ 高島さんが？」

完璧に思えた作戦が崩れたのは一通の電話。高島睦美の母、紀香からの電話はそろそろお昼という頃にかかって来た。

深刻に受話器を手にする元治はしきりに頷き、電話向こうの紀香の話を聞いていた。

かいつまむとどうやら帰宅した睦美と喧嘩をして口論になったらしく、そのまま彼女は家を出した……。

「なんだって？ それで、高島はどこへ」

腕組みしながら勝行が横柄に言うも元治は首を振るしかない。行き先がわかって居たら電話など悠長なことなどせず、睦美を呼びに行けば良いだけのこと。ワンテンポずれている言葉に真奈は気疲れすら覚える。

「それはまずいな。井沢先生、すまないが、車で村を探してきてくれないか？ 私は公民館で誰かから連絡が来るか待っているよ」

「それなら私も探しに行きます」

慌てて元治について行こうとする真奈だが、腕を掴まれる。振り返ると心なしか嗤っている勝行が居た。

「ダメだ。今野は携帯電話を持っていない。闇雲に探しても二度手間でしかない。井沢先生に任せてお前は作業の続きをしなさい」

「……はい」

勝行がせっかく捕まえた獲物をみすみす逃すはずもない。

真奈の思惑は脆くも潰えてしまった……。

——できるだけ人の居る場所に居よう。

そう思い、事務所付近の掃除を始めた真奈だったが、これがいけなかった。

手伝いをしてきている彼女を労うつもりなのか所員は彼女の時間稼ぎの作業を遮り、楽であるう二階の畳の掃き掃除をお願いしてきた。作業自体は確かに楽だし、さぼっていても人も居らず怒られる心配もない。けれど、それは勝行にも同じこと。

「今野。昨日の話の続きだが……、昨日、中倉が休む部屋で何をしていたんだ？もう一度話してみなさい」

「もういいじゃないですか。そのことは自分からちゃんと綾子さんに謝ります」

「そういうわけにはいかない。現場検証が必要だろう？何を盗ろうとしたのか、ちゃんと話して聞かせなさい」

強引に腕をとられて個室に連れ込まれる真奈。学年では大柄な彼女でも勝行相手では確な抵抗もできない。半ば引きずられる形になり、ふすまが閉じた。

「……その……、綾子さんの荷物に悪戯して少し困らせようと思つて……」

「ふうん。なるほどな。それは良くない」

「すみませんでした……。反省します」

「ふむ……。そうだが、何か隠していないか？」

窓を閉め、ブラインドの角度を変える。

「何も盗って居ません」

「本当か？今野は嘘つきだからな。何か先生に隠しているんだろ。見せなさい」

「何も隠してなんかいません……。やだ、放して……」

背後から忍び寄り、腕を掴み抱き込む。真奈はとっさのことに抵抗しようとするも掴まれ身動きが取れそうにない。

「いや！やめて……きやつ！」

背後から回された手が遠慮なく真奈の胸元に伸ばされる。むにゅっと驚掴みにすると、弧を描き乱暴に弄って来る。

「やめ……いたい……んっ……」

「なんかかさばるな？ここに隠したんじゃないのか？ん？」

「ちが……違います」

「ウソをつくんじゃない。じゃあ何がこんな手触りなんだ？」

「それは……ブラです……」

「ブラ？ふん。一丁前にブラジャーをしているのか？今野はませているな」

「そんな……だって、この前の身体測定で……するようになって……」

「ふーん、身体測定するように言われたのか？そんなに今野はおっぱいが大きいのか？ん？どれぐらいなんだ？教えなさい」

むにむにとおっぱいをもみしごく勝行はブラを服越しにずらし、柔らかで低反発な乳房

に指を這わせていた。

「んっ……やめて……やめてください……あん」

「やっぱりに胸に隠してるんだな？ だから言えないんだろ？ そうだろ」

「んっ……くう……そんなこと……ないです。何も隠してなんか……いません」

「ウソを言うんじゃない。なら先生は一体何を触っているって言うんだ？ ん？」

「……そ、それは……あたしの……む……胸です」

「ちゃんと言いなさい」

「……お、おっぱい……です」

「ウソを言うんじゃない。今野はこんなにおっぱい大きいのか？」

「んっ……嘘じゃないです……」

「どれぐらい大きいんだ？ おっぱいのサイズだよ。言わないとわからないだろ」

「……うっ……だから……んっ……それは……その……」

「ちゃんとと言いなさい。じゃないと先生はここを探さないといけないぞ？」

「……んっ……あ……おっぱいは……83くらい……だったかも……しれませんが」

「ふーん、今野のおっぱいは83センチもあるのか……。それなら悪かったな。先生、

てつきりここに盗んだモノを隠しているのかと思って思い切り触ってしまったよ」



そう言っって一旦は手を離す勝行。真奈は乳房を抱くようにして庇い、逃げようともがく。  
「でもなあ……、そんなに大きいなら谷間に挟んだんじゃないか？ ん？」  
「そんな！ 言いがかりです、あたしは何も盗ってなんて……」  
「必死で言うところが怪しいな。ちゃんと見せなさい！ 見せないなら中倉を交えて話をしないとイケなくなるぞ」

「それは……」

「早く見せなさい。さあ、さあ」

いっそのこと綾子に教えてでもこの状況を終わらせたくなる。仮に悪化したとして、勝行のような卑怯な奴に……？ だが、綾子に屈したら常盤祐樹にされるだけ。結局は気持ち悪い男にイヤラシイことをされるだけでしかない。ならば知る人は少ないほうが良いのだろうか？ それとも？ あるいは……？

どれが答えなのかわからず、ただただ強い口調で早口で責めたてられるとどんどん追い詰められていく一方。

「……うう、何も隠してなんかないです……」

混乱してしまう真奈は安易な命令に頷き、シャツを捲し上げる。  
ずれたブラが学年一、二を争う巨乳をかううじて隠しつつ、乳房を晒してしまう。



「ほう……良いおっぱいだなあ、今野は」

自分からおっぱいを晒したことに気をよくした勝行は彼女の正面に直り、ソフトボールぐらいの大きさのおっぱいを眺めていた。

「ぐふふ……でかいなあ……。何食ってたらこんなにおっぱいがでかくなるんだ？」

舌なめずりしておっぱいを見つめる勝行。その不安で真奈は微動だにできない。

「あ、あの……これで何も隠して無いって……」

「どうかな？ ブラジャーの中に隠してるかもしれないな。外しなさい」

「だ、だめです……それは嫌です……」

「隠すところが怪しいな。やっぱりここに隠したんだな？ ふん、少しぐらいでかいからってブラをして……。そんなことで先生の目を誤魔化そうなんて甘いぞ？」

勝行は騙されないと自分を騙しながら手を伸ばす。正面からブラジャーを外すことは手間取るけれど、ぶるんぶるん揺れる生徒のおっぱいは見えたえがあった。

普段体育の時もしっかり眺めているけれど、やはり真奈のおっぱいはでかい。

彼女自身、それを知っているせいもあるけどあまり激しい運動をせず、さらにはサイズの大きい体操服で隠そうとしている魅力は半減してしまう。

機会があれば一回り小さいサイズの体操着を着させて乳房の動きをじっくり監視しようと思った。その時はぜひ、ブラジャーを外させておく。きっと乳首がピンと立って……。

「ん？ なんだ？ このおっぱい……。乳首が見えないじゃないか？」

「……うう……」

色素の濃い乳輪の中心、あるはずの突起が見当たらず、少しぷくっと膨れているだけだった。

「ん？ んだこれ……」

不思議に思い、勝行は乳輪に指を伸ばし、弄ってみる。

「んっ……やめ……ああん……」

男に乳輪に触られるのは違和感があるらしく、真奈は甘い悲鳴を漏らしていた。だから感じてはいるのだとわかる。けれど、乳首らしきモノが見えない。

「なんだ、今野は陥没乳首なのか……。ふうん。まったく引っ込み思案だとは思っていたが、乳首まで引っ込んでるのか……。おっぱいも大きく出て来たんだから、ちゃんと乳首もぴんとさせなきゃダメじゃないか？」

「はい……すみません……」

怒られると反射的に謝ってしまう。やはりイジメられっ子気質は変わっておらず、強く出られるとすぐに従ってしまう。

「ふふん……。しょうがないから先生が今野の乳首を出してやろう……。いいか、これはお前の為なんだぞ」

「はい、先生……あ、ちょ……んっ……だめえ……ああん！」

両の乳房をしたから揉み上げ、顔を近づけると乳輪に口をちゅっと着ける。同時にちゅ

うちゆうっと吸いはじめ、さらに舌先で乳輪をなぞりだす。

「ああん……んっ！ やあん、……あ、あ、あ、だめえん……んっ！ ああん」

かさかな唇が乳房を刺すというのに舌先は唾液でぬるぬると乳輪を舐める。滑らかな舌の動きは背筋をぞくぞくさせる快感があり、気持ちでこそ拒みたいのに身体は求めるように反らせていた。

「んっ……ああん……はあはあ……せんせい……だめ……あん、あん、あん……おっぱい、すっちやだめえ……」

「ちゅ、ちゅぶ……ちゅう……ちゅっ……。しやうがないだろ？ 今野の乳首が陥没してるんだ。吸ったら……ちゅう……ちゅぽん！ ほら、出て来たぞ？」

ちゅぽっと音を立てて唇が離れると、そこには小指よりやや短い突起が見えて、やがてすばみ、また陥没してしまう。

「んっ……ああん……やあん……なんで……」

「くく、今野の乳首頑張ってるなあ……。よし、それじゃもう一度だ……ちゅう……ちゅう……ちゅずず……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ」

「んっ！ ああん……んっ、んっ、はあん……やあん……あ、乳首出てる……んっ、先生、もう乳首出てるの……先生に舐められてるから、ああん、くすぐたい……ひやうん！ あ、やめ……んっ、いた……んっ……噛んじや……んっ……んっ」

勃起し始めた乳首を軽く歯で挟む。舌先で何度もぺろぺろ舐めると真奈はしゃつくりをするかのように肩を何度も震わせ鼻息を漏らす。

「んっ……んっ……」

大きなおっぱいだと不感症なことが多いと聞いたけれど真奈は違うようだ。乳輪を舐めて刺激に守られてきた過保護な乳首を刺激すると、最初こそ驚いていたようだが既に快感を覚え始めている。

もっと初々しい反応が見たかったけれど、女として身体の出来上がっている彼女なら経験もあるかもしれないと思い、多少は我慢する。

それよりも先ほどから下半身が窮屈で困る。トランクスが湿り気を帯びており、真奈の喘ぎ声に挑発された愚息は下手に刺激しては達してしまいかねない。

勝行はチンポのポジションをなおし、ついでに真奈の股間を弄る。

「んっ！ 何するんですか……どこさわって……んっ……んっ……」

「こっちに隠しているのかと思って……。ちゃんと調べて置かないといけないんだ。わかるだろ？」

「そんなところに隠しません。だから……んっ……やめ……触らないで……」

しっとりとした感触がかるうじてわかる程度。股間を弄ると真奈はくねくねと動いていたが、乳首を軽く噛むと肩を震わせ硬直する。

痛いのかと思ひ彼女を見るが、真奈は潤んだ瞳を悔しそうに歪ませるのみ。半開きの口からは舌が見え隠れし、粘液質の唾液をねちやりとさせる。

チーズのようなふんわりした香りに酸味が混ざる。小便臭いこずえと違って女らしい身体付きの真奈はおそらくもう……。

碌な抵抗もしないだろうと勝行は彼女の手を取る。そろそろ我慢ができなくなり、固くなった部分に誘う。

「……ふえ……えっ！ 先生……やめ……変なこと……」

「どうかしたか？ ちゃんと言わないとわからないぞ。言いなさい」

「……だ、だって……そんな……先生、変なことしないでください……あ……」

困惑しつつも興味があるのか握って来た。不意の行動に勝行のチンポはズボン越しにぐっと力んでしまう。それは彼女の手にしっかり伝わり、動揺となって現れる。

「今野、一体どこに隠したんだ？ ここか……？ ん？」

チンポを握らせつつ、股間に手を忍ばせる。

ぬちゅ……ちゅ……。

湿り気を帯びた布地。強く押し、離すとそんな音がした。

「んっ……ああ……ふわぁん……」

かくんとアゴを揺らし、口を開いたまま荒い息を吐く。同時にたらあっと唾液が伸びる。

「んじゅる……」

気付いた真奈は慌ててそれを吸るけれど、重力加速度がやや早かった。それは勝行の手に垂れていた。

「感心しないぞ。先生に向かって唾を吐くなんて……。この不良め」

「ちが、ちがうんです……垂れちゃって……その……ごめんなさい」

「ダメだ。ちゃんと舐め取りなさい」

「……そんな……」

「お前は先生に向かって、いや、人に向かって唾を吐くのか？」

「……そんなつもりはなかったんです……でも……」

「ふん、そんなつもりがないならちゃんと舐め取りなさい。唾を吐くつもりがないならできるだろ」

勝行は立ち上がると真奈に向かってこんもり膨らむ TENT を見せつける。そしてベルトを外すとかちやかちやと音を立て、ズボンを下ろす。

「きゃ……やだ、変なことしないで……ください」

トランクスからぼろんとこぼれるチンポは皮を被ったモノ。臭いがきつく、汗とも小便ともわからない。

「んっ……臭いです……しまってください……」

顔を背ける真奈だけれど、勝行が頭を抑えて離さない。

包茎のチンポは土気色の皮に包まれた醜悪なモノ。そのかろうじてみえる亀頭部分は紫がかった赤。にじみ出る汁はするめのような生臭さがあつた。

「んう……やめて、そんなもの近づけないで……」



真奈は拒むけれど勝行の腕力にはかなわない。

ちゅっと頬に押し付けられ、生臭い粘液を付けられた。

「やだ……んっ、臭いです……やめ……やめて……あ……ん、ちゅ……ちゅぶう……」

拒むも強引にチンポをねじ込まれる。途端に目を白黒させる真奈は思わずごくりと唾をのむ。同時に口腔内に滴る粘液を喉の奥付近まで誘ってしまう。

生臭い男の人のモノ。ねばっこく、しつこくしょっぱく苦い。けれど、嗅いでいると身体が熱くなる。特に下腹部。

「ぶへっ、ぎゅぶへえっ……げへ……」

呼吸をするとアンモニア成分に咽てしまい、激しく咳き込みチンポを吐きだした。

「なんだ、しょうのない奴だな……。まったく……。おっとっと……すまん……先生もチンポ汁が垂れてしまったようだ……」

「え……え？」

咽て後ろにのけ反っている間に股間辺りが粘つくモノが滴ったのを知る。べとりとした汁。生臭く、きつと苦くしょっぱい。それは醜い皮被りのチンポから垂れた汁……。

「や、やだ……やめて……変なことしないで」

「なーに、心配するな。舐め取ってあげるだけだ……こーやって……」

ぱちぱちとボタンを外し、パンツを脱がす。青のパンティは普段学校に穿いていくようなものではないかなり布地面積の少ないモノ。誰に見せるつもりもないけれど、女子同士であっても見栄を張りたい気持ちが裏目に出た。

「イヤラシイパンティだな……。こんなもんを穿いてるのか、今野は……」

「ちが、ちがうんです……これは、その……あん！ やだ、そんなとこ舐めるなんて、先生変態ですか！？」

反論も待たずに勝行は真奈の股間に口をつける。そして舌をべろべろと這わせ、じゅうじゅうと音を立てて吸い付ける。

「あっ……んう……はあん……ふわあん……あっ、あっ……やだ……やめ……せんせ……へんたい……やめて、へんたい……そんなとこ……なめちゃ……ああん！ んっ！ なにこれ……きもち……わるいの……なんか……」

布越しに口を付けられるとくすぐったい気持ちにさせられる。

同時に下腹部がじゅんと湿り、熱くなる。

先ほど指でされた時よりソフトでねちっこい弄り方。割れ目がじゅうっと湿り、汁が垂れてしまう。

「じゅずう……はは、しょっぱいぞ。うまいなあ、今野のマンコは……。くく……結構毛が濃いんだな……。それに硬い……。なのにマンコはこんなに……ああ、キレイなピンク色だ……」

「い、いや……だ、変なこと……恥ずかしいです……」

割れ目をじろじろ見られてちゅばちゅば吸われると顔から火がでるぐらい恥ずかしくな

る。同時に下腹部が熱くなる。火にかけられた鍋のようにどんどん熱を帯び、溢れ、滴らせる。

「はあはあ……んっ……はあはあ……ああん……せんせい……やだ……やめて……もうやめ……ああん」

ねちっこい舌が内側の敏感な膣壁を撫でる。唇があてがわれ、遠慮なくほじくられる膣口。勝行はじゅずうと吸うとぺっと吐き、またじゅずうと吸って鼻を擦る。

「……んう……恥ずかしいです……」

もしかしたら臭いのかも。もしかしなくても臭いだろう股間と、唾を吐く勝行を見て羞恥が増す。臭いのであればそんなところ舐めないでほしい、舐めるな、舐めないでください……。でも、少しぐらいなら舐めてもらってもいいかもしれない。

「んっ……んっ……ああん……んっ……んっ……はあん……なんか……変な気分……だめ……んっ……やだあ……せんせい、そこ、アソコなめて……舐められて……なんか、あたし、変な気持ちです……ねえ……せんせい……」

抵抗する姿勢も見せず、膣への愛撫に悶え始める真奈。自然と股を開き、されるがままにしていた。

「くくく……今野はいやらしい子だな……」

涙目を向ける真奈に勝行は満足そうに笑う。そして中腰になるとチンポを掴み、割れ目にあてがう。

「やっ、だめえ……そんなこと……しちゃ困ります……せんせい、しないで……」

チンポをマンコにあてがわれる。その行為が意味することは真奈も知っている。それだけにこんな形で求められるのは絶対に嫌だ。舌足らずな口で拒み、せめてもの抵抗と手で勝行のチンポを掴んで拒む。

「おお……くう……今野はイタズラっ子だな……。チンポを触るなんて、スケベめ」

「んっ……そんなつもりないです……せんせい、そんなことしちゃだめです……」

「なんでだ？ 今野はこんなにマンコを濡らしてるじゃないか。欲しがつてるんじゃないのか？ 先生のチンポ」

「だって、そんな……でも……だめなの……おねがいです……だめ……です」

真奈の視線はチンポと自分の割れ目をしばし見つめ、勝行をおそろおそろ睨む。そしてまた割れ目を守ろうと手でチンポを押しつける。

「今野の手はキモチイイな……くく、本当は入れたいんじゃないのか？ ん？」

鈴口からどくくと溢れる汁。それが真奈の指に絡みつくも、油断したらそのままぬるつと入ってしまいそう。

「ん……いやあ……いやなのにい……」

涙目になりながらチンポを見つめる真奈。

汚らしいモノを擦りつけられるそれは見た目も臭いも嫌悪感を抱くモノ。けれど、擦りつけられる度に身体に走る快感。どうしてこんな行為がと困惑してしまう。

「今野は嫌らしいな……。先生、いっちゃいそうだぞ……。くう……。どろっと滲む粘液に白い筋が見える。精子が混じっているのかと思うと一線を越えかねないことに怯えてしまう。」

「やだやだ、やめてよ……。いやだ、先生……。なんか変なのでてる……」

「くく。どうせ毎日オナニーしまくってるんだろ？ どうなんだ？」

「オナニーなんて……。そんなこと……。してませんってば……。あ……」

最近オナニーという言葉をよく聞くせい、辞書で調べてしまった経緯がある。自分で性器を弄って性的興奮を得る行為。今一つピンとこなかったけれど、前に体育館で無様に隠れた時に得られた快感はそういう行為で得られるものだと思致する。

夢だと思っていたのに本当は誰かに？ 誰に……？

「はあん！」

にゅぷつと股間が擦られる。もしかしてと思い股間を見ると、指の間からチンポが見えた。指で挟まれたチンポは皮が捲れて赤黒いミミズの頭のようなモノが顔を出す。

「え……。捲れたの……」

「うう……」

同時に苦しそうな声を漏らす勝行。

「先生、ごめんなさい！ 痛かったですか！」

心配したわけではない。故意ではないけれどチンポを痛めつけてしまったことで怒らせたかもしれない。そう思い慌てて顔色を伺おうと覗き見る。

「急にこんなことをして……。本当に悪い子だ……」

低く呟く勝行に真奈は眉を顰めて小さくなる。怒られる。瞬間的にそう感じてしまい萎縮していた。

「ご、ごめんなさい……。あ、あたし……」

「悪いと思ってるのか？」

「す、すみません……」

「ここは男の人のデリケートな部分なんだぞ？ まったく……」

「はい、ごめんなさい」

平身低頭謝る真奈に勝行はだんだん調子に乗り始める。今ならいくらか言うことも聞かせやすいと判断した彼は真奈の肩を掴み顔の前にチンポを見せつける。

「んっ、や、臭い……」

突然の臭気に真奈は顔を歪める。

「こら！ 今野。お前が先生のチンポを痛くしたんじゃないか。ちゃんと責任を持ちなさい」

「そんなこと言われても、あたし、どうすればいいかわかりません……」

「なあに、簡単なことだ。ちよつと舐めてくれれば痛みも和らぐ」

「舐め……。そんなこと……。したくないです」

「今野！」

「はい……………」

強い口調について頷いてしまう。これ以上大きな声を出されるのは辛くなり、狭くなった思考の結果、真奈は……。

「こ……………これを……………舐めるんですね……………あ、あむ……………ちゅ」

口を大きく開き、頬張る真奈。口の中に生臭さが溢れ、どろっとした粘液が舌の上に広がる。

「んっ、んぶう……………」

途端に苦しくなり口を離す。

「こらこら、ちゃんと舐めなさい……………ほら、早く」

「は、はい……………あむちゅ……………んむんむ……………ちゅ」

臭気に涙を溢しつつぺろぺろと舐める。

めくれ上がったチンポは舌が触れる度にびくびくと震え、どろっと粘液を垂らす。それは涎に混ざり、苦しさのあまりぐくりと飲み込んでしまう。

「んぶう、ぺろぺろ……………ちゅう……………べろ……………んぷはあ……………んちゅ……………ちゅう……………はあはあ……………先生、もう……………」

「だめだ。全然舐めてないじゃないか。ほら、ちゃんと舐めなさい。

「はい……………ちゅ、ぺろちゅ、ぺろぺろ……………」

拒むことはできずに言われるままチンポを舐める。

誰でも良い。誰か来てほしい。そうしたら……………？

勝行のチンポを舐めているところを見られたら自分はどうなるのだろうか？

公民館の大人ならまだしも、元治が来たら？ 当然学校を含めた大問題になる。人の口に門戸は立てられない。いつしか何が起きたのかは周囲に知れ渡り……。

こんな狭い村だ。すぐに全員が知るのだろう。

今野真奈が教員のチンポを舐めていた。

「んちゅ……………先生、ねえ、早く終わらせて……………んちゅ、ください……………ちゅちゅ」

「んゝむ、そうだなあ、先生もすぐに終わりそうだぞ……………あー、良い気持ちだ……………もつと先っぽを舐めて吸ってくれ、そうしたらすぐ終わるかもしれないぞ？」

言われるまま先っぽを舐める。おしっここの穴をちゅちゅつと舌先で突き、唇で締め付ける。するとにゅぶつと粘液が滲みだす。

「んべえ……………ちゅ……………ちゅ」

唾液で粘液を溢し、再びチンポに吸い付く。

先っぽのミミズの頭のような部分を全体的になぞるとびくびくつと震える。先っぽがどうやら弱点のようだ。真奈は意を決して先っぽを舐めまわす。

「んべろ、んちゅべろ……………ちゅうちゅう……………んふう……………んっ、臭い……………んちゅ、ちゅ」  
チンポを掴みしこしこと上下させる。どくどくと溢れる粘液と、漏れる勝行の声。



「んちゅ、ごく……ちゅ……あむちゅ……ちゅう〜っば……ちゅ」  
唾液を溢す暇ももったいない。どうせ沢山出されたのだからとチンポ汁を飲み下し、ちゅぱちゅぱチンポに奉仕する。

「先生、もう……おねがい……はやくう……」

顎が疲れて来たところで勝行を見上げる。許しを請う上目遣い。学年でもトップクラスにでかい乳房を揺らしながらこびへつらう真奈を見下ろし、勝行はぶるつと震えた。

「くう、うっ……あ……」

まじまじと見つめると勝行は苦悶の表情を浮かべつつ見返してくる。同時にびゅつと顔に放たれる白いすじ。

「きゃっ！ なにこれ……ぶっ……くさい……ん、や、やだぁ……」

突然のことに庇おうと手を伸ばす。握っていたそれはびくんと震え、さらにまたびゅつと迸る白い汁。粘液質で顔、胸、お腹、パンティ、内腿といたるところにかかっていた。

「……んう……くさい……先生、酷い……うべ……べ……」

唇に垂れた汁を吐きだそうとするが、べたついてそれも難しい。

「はぁはぁ……あー……あ……」

気が付くと勝行が放心状態で身体を背後で反らしていた。

「ふう……」

突然の事態に困惑を隠せない真奈だが、勝行は気にせず立ち上がり、背を向けるとズボンを直す。

「……あの、先生……」

「なんだ？」

「その、痛かった……ですか？」

「くく、なんだ、そんなことか……。ま、急に剥かれたから驚いたけど……。気持ち良かったぞ。今野」

「え……」

「やっぱりスケベな子だったんだな。チンポを剥いたりして……。本当はやりたかったんだろ？」

「ち、違います。ただ、慌てて……それで」

「まあいい。だが、今野、一体何を盗もうとしたんだ？ 最近、お前は中倉を気にしてるようだけど、何か気になってるんだろ？ 良かったら先生が力になるぞ？」

「……別に大丈夫です……」

正直、勝行が頼りになるとは思えず、本心からそう答えた。

「そうか？ 先生は中倉の担任だぞ？ いろいろできてると思うがなあ？ 探し物をするにしても中倉が居ない時にやりたいだろう？ ん？」

「それは……」

それはつまり、足止めをしてくれるということ。つまり、探し物ができる。足止めだけでなく、場合によっては荷物検査などでもできるのでは？ 例えば没収なども……。

「本当ですか……？」

だとしたら真奈にとっても都合が良い。綾子への対抗手段を持てるのだ。

「その代り、今野のことをよく知りたいなあ……。それをお願いを聞いて欲しいぞ」

「うう……」

ズボンを直して振り返る勝行だが、その股間は再びテントを作っていた。

「なあに、先生も鬼じゃない。昨日のことは中倉との喧嘩かなんかだろう。今野もよく反省したみたいだし、このことは内密にしてやる。そのうえで、今野が中倉と良い関係を維持するお手伝いをしたいんだよ。その為にも今野のことをよく知りたいんだ。わかるだろう？」

俯くと青臭い汗が滴る。

勝行の提案を受け入れれば、また今の様なこと、場合によってはさらに……？ まさか教え子に手を出すようなことはしないと信じた。けれど、それは綾子に怯えて暮らすことも一緒。彼女にチンポが無くとも、彼女の意を汲んで動くモノが居る。

顔が違っただけで中身は一緒。どれも性欲に塗れた男ばかり。真奈は白い濁り汁を拭う。外では車の音がした。元治が戻って来たのだろう。

どうするべきか？ わからない。けれど、決断しなければならない……。

枝分かれする未来があのもしいない……

.....